
女好き王子の国盗り物語

猫小判

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大好き王子の国盗り物語

【Nコード】

N0747I

【作者名】

猫小判

【あらすじ】

女性を落とすことしか才能が無い女誑しな第二王子に玉座が回って来た！王子は、武略に優れ謀略に精通する老将に担がれ、国の存続のために女性を口説きまくる！剣と魔法の世界で繰り広げられる痛快(?)女誑しファンタジー！

第一話 看板のない怪しい店で

太陽は天頂で燦々と輝き、空は澄み切ったブルーで雲一つ無い。気持ち良い夏の日の昼下がりである。

王都のメインストリートには露店が並び、それを冷やかす家族連れや腰に剣を差した冒険者でごった返している。

そんな活気溢れるメインストリートから一本外れた人気の少ない狭い路地に、その店はひっそりと門を構えていた。といっても、入り口の扉自体は周りの民家と何ら変わった所はなく、何も知らない者は気さえ止めないだろう。

その扉の前で、初老の男性が立ち止まった。

漆黒であつたであろうオールバックに固められた頭髮は白髪が混じってグレーになっており、顔に刻まれた無数の皺は深い。が、その漆黒の瞳は老人とは思えないほど炯々と輝いており、年齢を感じさせない筋骨隆々とした肉体は彼を一回りどころか二回りは若く見せている。

彼は店を見上げると、眉間の皺を深くし、ため息をついた。部下の報告が間違えていなければ、彼の主君はこの看板も掲げられないようないかわしい店に居るからである。

彼は諦めたようにもう一度ため息をつき、店のルールに従いドアを三度、ノックした。すると少しだけドアが開き、年端も行かぬ少女がひょっこりと顔を出す。

「今日は貸切となっておりますのでお引き取りください」

少女がそのままドアを閉じようとしたところを、彼はがっしりとドアを掴んだ。

「わたしは客ではない。王子を連れ戻しに来たのだ。王子を呼んで欲しい」

「それはできません。お引き取りください！」

少女は顔を真っ赤にしてドアを閉めようとノブを引っ張る。が、ド

アはびくともしない。少女と男の力の差は歴然である。

「帰って、くださいー！」

「それは出来ぬ相談だ」

男は眉一つ動かさずにドアを力任せに引き開ける。少女がずずと引きづられた。

「止めてくださいー！」

「済まん」男は苦もなくドアを開き、店の中に侵入した。

「あーん！ またお姉さまに叱られるー！」

後ろの方で少女がべそをかいているが、男にとってはいつものことであるので気にする素振りもない。

と、男の正面に妙齡の美女が立ちはだかる。美女は豊満な胸を強調するように腕を組んだ。

「グレイヴ様。何度お願いいたしましたらお止めくださるのかしら」
「文句はわたしではなく仕事をサボってここに来る王子に言え」

男は無然とした様子で言い放った。美女は口元を隠して小さく上品に笑う。

「まったく、王子様は困ったお方ね。また一人の可愛い妹が自信を無くしてしまったわ」

「そう思うのなら王子を立ち入り禁止にして欲しい。それより、王子はどこだ？」

「いつもの部屋でお酒を飲んでおられますわ」

美女はそう言って、すつと道を開ける。男は美女に軽く頭を下げてから、店の奥へと歩き出した。

その部屋に近づくに従い、乱痴気騒ぎの余波が初老の男にまで届いてくる。彼のこめかみがひくつく。彼はいつもの部屋の前に立ち、一つ深呼吸をした。

「失礼致しますぞ！」

そう断って、バンと勢い良くドアを開けた。同時に、男は眉間を右手の親指と人差し指で強く抑えた。

王子は女性達の中に埋もれていた。ある女性は王子の脚にしなだれかかり、ある女性は後ろから王子の首に腕を廻して豊満な胸で王子を埋もれさせ、ある女性は無い胸を必死で王子の腕に押し付け、ある女性は王子の膝の上に腰を下ろして正面から抱きついている。

これで困った表情をしているのなら可愛いものなのだが、その表情はまさしくエロオヤジのそれである。女性の尻や胸を触りながら、女性が恥ずかしがる様を眺めて悦に入っているのだ。

初老の男はともすれば血管がブチきれそうな感情を何とかかんとかなだめすかし、きわめて冷静を装って口を開いた。

「王子。大変な事件が発生いたしました。至急、城にお戻り下さいますよう」

王子は男の存在にようやく気づいたように顔を上げる。が、すぐに女性の胸へと視線が戻った。

「じい、それはこの娘のけしからん胸の成長よりも大事なことになるかい？」

王子は背中に取り付いている女性の砲弾のような胸を軽くタッチする。女性はイヤンと体をくねらせるだけで、王子から離れようとはしない。満更でもないらしい。

男のこめかみと口元がひくひくとひくつく。男は爆発しそうな怒りを無理矢理押さえ込んで極力いつも通りの調子で王子に答えた。

「そのようなものなど比較対象にすら成り得ません。どうか、御帰還ください」

「えー？ まだ払ったお金分もこの子たちと楽しんでいないのに？」
王子はそう言いながら、頭上の双丘にぐりぐりと頭を埋める動きをする。

「やんっ、王子様のえっちー」

「王子様あ、ユナにばかりじゃなくてあたしにも構ってよう」

「あ、ズルい！　そういうおねだりはしない約束でしょ！」

「ねえ、うちも」

「ちよっ、ちよっと！　もう！　……王子様、わたしの胸もなかなかのものなのよ？」

ワイワイと騒ぎ始める女性たち。女三人寄れば姦しいというが、それどころでは無い騒がしさである。

ぶちん。

何かが切れる音が、小さくはあれど確かに、した。

男は一切の表情をその皺の目立ち始めた顔から消し去り、大きく息を吸い込む。

「黙れ淫売共！　貴様らの居住権を取り上げて女に飢えたゴブリン共の群に放り込むことも簡単に出来るのだぞっ！！」

そして一喝。場は瞬時に静まり返る。女性たちは王子にしがみついて、かたかたと震えている。

王子は大きくため息をついた。

「あーあ。じいのせいで遊ぶ雰囲気じゃ無くなったじゃないか。：

……それで、何が起ったのさ？」

「陛下が、暗殺されました」

男は眉間の皺を深くし、低く響く声を絞り出した。王子は不満そうな表情を変えようもしない。

「そんなこと？　僕には関係の無い話じゃないか。第二王子の僕には、ね。話がそれだけならもう少し遊ばせてよ。今日中には帰るからさ」

「それだけではありません。第一王子のリチャード様は放逐され、殿下に玉座が回って来ました」

王子は男の言葉にピクリと眉を上げる。

「ふうん……。お飾りなわけね。それじゃ尚更遊んでいても大丈夫じゃないか」

「何を仰る！　お飾りとはいえ貴方は王になるのですぞ！」

「あのねえ、じい」

王子は女達を退かして、立ち上がる。上背は周りの女達より少し高い程度、線が細い体だ。王子は手を広げ、その悪く言えば貧相な体を強調する。

「こんな貧相な体でどうやって老獪な宰相やら大臣やらを操ればいいのさ？ 僕は操り人形でいいから、好きにさせてくれよ」

「……貴方のご母堂の悲願ですぞ」

男が躊躇いながらもそう口にした。王子の顔が悲痛に歪む。

「卑怯だぞ、じい。それを言われたら、動かない訳にはいかないじゃないか」

「私は全力を尽くして貴方を王にして差し上げましょうぞ」

男が真っ直ぐ王子の顔を見る。王子はしばらく俯いていたが、やがて顔を上げた。

「……わかった。僕は立派にじいの神輿を務め上げよう。まず、城に帰ろうか」

「御意」

王子の目は先程とは違い、決心と活力で充たされていた。

第一話 看板のない怪しい店で（後書き）

お久しぶりの方はお久しぶり、初めての方は初めまして。

ファンタジー要素いっぱい詰め込みつつ、全くファンタジーっぽくない作品を目指していきます。

今後ともご贔屓いただけるとうれしいです。

第二話 戴冠パーティにて

王城内は煌びやかな装飾が施され、これでもかというほどの蝋燭に照らされて、それはそれは豪華な様相であった。本日は王の即位の式典の日。城内には国内外の要人が多数招待されており、ここから近隣国の内情を探らんとする、腹黒い会話が繰り広げられていた。

王子、否、今日から王であるリナレス・フェイブルは玉座の上で頹杖を突き、一つ高い壇の上から冷めた目で会場を見下ろしていた。後ろには壮年でありながら筋骨隆々で活力に満ちた男、グレイヴ・ウェルズが控えている。

「ねえ、グレイヴ。全く、茶番だとは思わないか？」

「珍しいですな。王子、いえこれからは陛下でしたな。陛下と意見が合うとは」

グレイヴはリナレスと同じようにホールを鋭く見下ろした。ホールに招かれた人間のほとんどが宰相派といわれている諸侯で固められており、また国外からのゲストも険悪な関係であったはずの国の重役や、同盟国でない国の人間も当たり前のようにパーティに参加していた。

「全く、あからさまだね。何より……」

リナレスは怒りも露わに玉座のて肘掛けに拳を叩きつけた。

「いかがなさいました？」

「姫君が全然いないじゃないか！」

「……陛下」

グレイヴはあまりにマイペースな主君にあきれ返って溜息をついた。「だって、重要なことだろう？　そうでなかったらこんなところに来ないで色街を冷やかしていたほうが10倍マシさ！」

「……仕方がないでしょう。主催は陛下という名目ですが、実質取り仕切っているのは宰相ですからな」

「全く、傀儡として据えるのは構わないけど僕の些細な要望くらいは叶えてくれないものだろうに」

リナレスは怒りというか不満も露わにフンと鼻を鳴らす。グレイヴはまたも深いため息をついた。

「楽しんでおられますか……いえ、どうやら退屈な御様子ですな」
王であるリナレスよりも上等そうな装いに身を包んだ細身の40男が、リナレスの前で一礼した。グレイヴは表情を硬くして姿勢を正し、リナレスは不満の色を一層強く顔に出す。

「いやいや、そんなことはないさ。放蕩者な上に長子でもない僕が王になれるなんて、まったく夢のようで胸がまだドキドキしてるよ。全てはシールズ宰相のおかげさ」

リナレスは皮肉るように肩を竦めた。いや、事実、皮肉を言っているのだろう。宰相、アルフレッド・シールズは表情を険しくする。

「何が、御不満ですか？」

リナレスはそれには答えず、手元の台の上のグラスを手に取り、くいと煽った。近くを通った侍女を呼び寄せて、新たに赤い液体でグラスを満たす。グラスをくるくると回して中身を波立たせた。

「酒があって、いい食事があるってのはそれだけで幸せなことだよ。でもね、人間それだけじゃ生きていけないのさ」

「と、言いますと？」

宰相は怪訝な表情でリナレスに問うた。同じく、グレイヴも首をかしげる。

「分かんないかなあ。女の子だよ女の子！ それもとびきり見目麗しい、ね」

「はあ……」

「その要件さえ満たしてくれるんだったら僕のほうは満足だよ。政治は宰相に任せていいよね？ そのためのポストなんだから」

「……承知いたしました。近く、麗しい妃を招くことに致しましょう。政略婚となってしまいますが」

リナレスはここにきてようやく笑みを浮かべた。

「よろしく頼むよ」

「それでは、賓客のもてなしをしなければならぬので私はこれで失礼いたします」

宰相は深々と頭を下げて、パーティ会場の中心のほうへと消えていった。

「陛下、よいのですか？ あのような約束をして」

「ま、困るのは僕じゃないしね」

「まったく……」

グレイヴは三度溜息をついた。リナレスのほうは将来自分の元へ来るであろう姫君を想像して鼻の下を伸ばしていたのだった。

第二話 戴冠パーティにて（後書き）

かなり久しぶりの更新にもかかわらず短いという……

公約（？）なんてどこかの歴史だけ長い党も真っ青なくらいぶっちぎりで破ってますね。皆さんごめんなさい！

……今後も鈍亀更新（死語？）になると思いますが、どうか見捨てないでください。

第三話 鉄の姫君

いわゆる天才と呼ばれる一人の少女がいた。彼女は幼少のころから軍学を修め、あらゆる武器を手足のように扱えるように鍛錬を積み、政治についてもいかにすれば民衆を従えられるかを学んだ。彼女は12歳で軍学の師を仮想戦とはいえ完膚なきまでに撃破し、15歳にしてあらゆる武器の扱いにおいて軍で五指に入る実力とうたわれ、19歳の現在では王を超える絶大な人気を民衆から得ていた。彼女は天才だった。世が世であれば、いやどんな世の中においても賢君と慕われ英雄と称えられる器の持ち主であろう。が、世の中はそれを許さなかった。ひとえに、彼女が女であるがゆえに。が、彼女は周囲の雑音などどこ吹く風。ひたすらに学び鍛錬を積み、求道者の道をひたすらに歩み続け、いつしか鉄の姫君という渾名が隣国にも轟くようになっていた。

「で、僕の妃はその鉄の姫君、と？」

「はい、そのようでございます。しかし、如何に家中で疎まれている者とはいえ、かの大国から妃をとることができるとは、これほどの名誉はそう見当たりませんぞ」

老騎士グレイヴは誇らしげに胸を張る。リナレスはそれとは逆に溜息をついた。

リナレス・フェイブルが統治するフェイブル公国は山間部に主な領地をもっており、人口が少なく生産力もない歴史だけが取り柄の、いわゆる小国である。対して、鉄の姫君の出身国であるライナリアス帝国は大陸の母なる川であるユーフラル川の河岸の半分を領し、大穀倉地帯から生産される大量の穀物とユーフラル川の水運から上がる莫大な資金をバックに領土を広げる大国であった。常識的に考えれば、山間の小国に平原の大国の姫君が嫁いでくることなど考えられない筈である。

「じい、もうぼけてしまったのかい？　遊び人の僕程度にも分かることを分らないとでも？」

リナレスの眼光は珍しく鋭い。この調子が続けば立派な王になれるだろうに、とグレイヴは残念に思いながら口を開いた。

「……宰相が国を売ったということでしょうな。大方、王子が生まれた途端に陛下の首を差し出して、自分は幼王の後見役としてフェイブルの地を牛耳るつもりですな」

「だよね。というわけで、鉄の姫君との縁組はなかったことに。鉄仮面みたいなゴツイ女は僕の守備範囲外だよ」

「左様ですか。宰相がなんと申すか分かりませぬが、断わりま……」

「なんだこの女！？　貴様どうやってここまで、ぐあっ！？」

「貴様っ！　ぐおっ！？」

「出遭え出遭えい！　賊が城内に侵入したぞ！！」

「何やら、城内が騒がしいですな」

グレイヴが眉をひそめる。リナレスは肩を竦めた。

「賊なんて珍しいね。こんな何も無い城に押し入って何をしようっていうんだか」

「小国の城だと侮られましたかな？　私が直々に教育した近衛騎士団は大国のそれにも引けを取らない……」

「ば、バカなっ！　一太刀も見舞えないだと！？」

「だ、団長を呼べ！　いや、グレイヴ様をお呼びしろ！！」

「ここはもう保たん！　兵をかき集めて、何としても賊を捕らえるのだ！　いや、殺してもかまわん！！」

「……何やら押されているようだけれど」

「再指導が必要でしょうな……」

グレイヴは腕を組み、眉間に深く皺を寄せる。

「ここは大丈夫なんだろうね？」

「私がいる限り、陛下は大丈夫です」

グレイヴは答えになっていない答えを返し、剣の柄の先に手を置いた。リナレスは深く腰掛ける。当然のように丸腰である。グレイヴはあきれた表情を作る。

「陛下は、御自分の身は自分で守ろうという気は無いのですかな？」

リナレスは更に腕を組んだ。

「無いね。僕は無駄なことはしない主義なのさ」

「全く」

グレイヴが小さくため息をついたのと同じ、王の執務室の扉が勢いよく開く。転げるようにして入ってきたのは一人の近衛兵だった。

「お、お逃げください陛下！ 間もなく賊がここまでやってまいります！」

「へえ、そう」

リナレスはそれだけ返しただけで動こうともしない。兵は焦れるようにもう一度声を上げる。

「陛下っ！」

「良い」

いきり立つ兵をグレイヴが制す。

「しかしグレイヴ様っ！」

「良いというに。それより、攻撃を中止して賊をこの部屋に連れてこい。陛下が興味をお持ちのようだ」

「その必要は無い」

凜と澄んだ女の声。大きな声ではないが、それは鈴の音のように確かにリナレスの鼓膜を震わせた。

「しかし、警備の手薄な城だ。これで自分の身を守っているつもりか、我が伴侶になる可能性のある男よ」

姿を現した女は戦女神であった。少なくともリナレスにはそう見え

た。

ずっと鼻筋が通った整った輪郭、ともすれば冷たいという印象を与えそうなつり目、きゅっと閉じられた薄めの唇、後ろでまとめられたはちみつ色のロングヘア、純白の鎧と純白の装飾品。人形のよ
うな完璧な容姿である。

女は剣を構える。

「さあ、我が剣、受けられるか！」

女は構えの状態から一瞬でトップスピードに乗る。その勢いのまま、無駄のない流れるような剣筋でリナレスの頭をたたき割らんとするが、それはグレイヴの剣に阻まれた。

「ふむ、なかなかの剣筋だな。貴殿が噂の鉄の姫君、ソフィア・ライナリアスか」

「貴公こそ、なかなかの剣。老いる前に仕合ってみたかったものだ」グレイヴが剣を引くと、鉄の姫君ソフィアも同じく剣を引き、鞘に戻した。どっかりと腰を下ろしたままのリナレスが口を開く。

「大国の姫君が賊のまねなんぞして何の用だい？ 婚約の日はまだまだ先の筈だけれど」

「我が剣気を間近で受けて眉ひとつ動かさぬか。噂よりも骨はあるようだな」

リナレスは肩を竦める。

「それは良かった。僕は君のお眼鏡にかなったかな？」

「失格ではない、といったところだな。今日は下見だ。我が伴侶が小心者でもブ男でも無くて安心したぞ」

「そりゃどーも」

ソフィアはふっと笑って踵を返す。

「では、婚約式典を楽しみにしているぞ。くれぐれも私を失望させぬようにな」

「もう少しゆっくり……ってもういないし」

リナレスが声をかける前に、すでにソフィアはいなくなっていた。城には静寂が戻ってきている。彼女が来たことなど夢だったかのよ

うだ。

「嵐のような方でしたな」

「ああ。それに落とすのは難しそうだよ。……燃えるね」

リナレスは闘志を燃やすように拳を強く握りしめた。グレイヴはあきれたように溜息をつく。

「それでは、縁談は進んでもよろしいのですね？」

「ふっ、どうやって落としてやろうか……」

グレイヴの声はリナレスに届いていない。いつもの悪い癖だと判断して、グレイヴは放置することに決めた。

「しかし、あれほど剣を使える者を政治の道具に使うとは勿体ない。私だったら外にやることはしないが。何にせよ、彼女が輿入れしてくる日が楽しみであるな」

グレイヴの中では王に権力を取り戻すための新たな方策が構築され、リナレスの中ではあの鉄の姫君を如何にして落とすかの作戦が幾層にも積み重ねられていくのだった。

第三話 鉄の姫君（後書き）

疲れた……

といってもフツの作者さん方の更新スピードはこのくらいですよ
ね。僕の筆が遅すぎるんでしょうか。

今回はお姫様登場、の回でした。動きが少なかったので地の文が著
しく少ない……。修業しなきゃ。

感想や評価を書いてくださるといいう優しい方々、どうぞ宜しくお願
いします

第四話 城下町にて（1）（前書き）

復活いたしました。長らくお待たせしてしまつて申し訳ありません。

第四話 城下町にて(1)

空は広く晴れ渡っている。太陽は燦々と輝き、空気は澄み切っている。王都のメインストリートは露天商で埋め尽くされ、それを冷やかす客たちで川のような流れができ、雑然とした空気を生み出している。街に巡回の兵の姿は無く、そこかしこで小さいざこざが起こっていた。

そんな少々危険と言える王都のメインストリートを、リナレスは市民に扮して雑踏に紛れ込み、ある場所へと向かっている。その足取りはいつもの雲のようにふらふらとしたものではなく、一本の芯が通ったしつかりとしたものだった。

「そうだな……手土産なんかあるといいかもね」

リナレスはぽんと手を打って、露天商の店に視線を向ける。品揃えはいいとは言えない。リナレスは小さくため息をついた。

「うーん、やっぱうちみたいな小国にイイ物が入ってこないか」

「何だと？」

リナレスの小さな呟きを耳聴く拾った露天商の店主の屈強な肉体を持つ男が、ぎろりとリナレスを睨みつける。

「俺の店の品の、どこが品質が悪いって言うんだ！」

露天商の男が広げている商品は、芋や麦などの食品、木彫りの食器類、布で作られた簡素な服などであった。品質が悪いようには見えない。むしろ、つけている値札からすれば、誰もが満足のいく品々だろう。しかし、リナレスが求めているモノと、露天商が扱っているモノとは絶望的な隔たりがあったのだ。

「いや、君の扱っているモノが悪いとは言っていないよ。ただ、どこ
の露店もイマイチな品揃えだなんて」

リナレスがいつものふわふわとした調子で答えると、露天商の男はさっと立ちあがった。男の顔は赤らみ、額には青筋が立っていた。

「てめえ！ バカにしてんのか！！」

露天商の男はリナレスの胸倉を掴み、締め上げる。

「この品々はなあ、俺と仲間が！ 碌に民に食料や物資を提供しない国に代わって！ 整備されていない上に治安が悪い街道を必死の思いで運んできた品々なんだ！」

「ちよつ、と。この手、離してくれないか、な……。くる、しい」

リナレスは男の手を掴んで、どうにか引きはがそうとするがびくともしない。懇願しても、離してくれる様子が無い。それどころか露天商の男は、リナレスの体を持ち上げ、宙に浮かべた。

「それを、それをバカにしゃがって！ てめえみたいな街にいる奴はなあ、俺たちに感謝だけしてればいいんだよ！！」

「ごめ、ん。かんしゃ、してるから……はなし、て」

リナレスの顔は蒼白になり、助けを請う声は掠れて、もう聞き取れない。露天商の男は自分の言葉に酔っているのか、うすら笑いを浮かべているだけでリナレスの危急な状況に気づかない。リナレスの意識は切れかかり、力が抜けて四肢がだらりと垂れ下がった。

「あ、が……」

「おい」

と、遠巻きに見ていた群衆の中から声が上がる。至極だるそうな、女のかすれたような声。

「なんだあ？」

「そいつを離してやれよ。間違っただけで殺してもしたら、めんどくさくなるのはてめえだけじゃねえんだ」

「えらっそうに！ 姿を見せやがれ！」

男はヒステリックに叫んだ。

「全く、この程度でうろたえるなんて、男としては下の下だな」

ハスキーな声の女は吐き捨てるようにして溜息をついた。女が群衆を掻きわけ、全員の前に姿を現す。と同時に、光を反射する銀色の何かが閃いた。

「ぐあっ！？」

露天商の男が悲鳴に似たうめき声を上げ、リナレスを取り落とす。

男の手の甲には、小さめの投げナイフが突き刺さっていた。解放されたリナレスは喉を押さえてせき込み、なんとか酸素を肺に送り込んだ。

「ぐおおお」

露天商の男はうめき声を上げながら、手の甲のナイフを引き抜いた。これを投げた張本人であろう女を睨みつける。そこで初めて、女を見た。同じく、群衆も。全員が言葉を失っていた。女が、全員の想像からあまりにかけ離れた容姿をしていたからだ。

女は小さかった。ありていにいえば、子供のような体躯である。ただ、顔つきは大人びていて、切れ長の目は冷たく妖艶にさえ見えた。髪は肩のあたりで無雑作に切りそろえられており、女というより少年といった態である。なにより、もっとも彼女を異彩たらしめていたのは、彼女の背負う剣であった。柄を含めた剣の全長は彼女の身長に迫るほど長く、剣の幅は彼女のウエストとほぼ変わらない幅広である。どう見ても扱えない、それどころかそれを背負って普通に歩いているのが奇跡に思えた。

女は呆れたような蔑むような視線で露天商の男を見る。

「手の甲にちよつとナイフが刺さったくらいでずいぶん痛がりようだな。そのでかい図体は飾りか？」

「バカにしやがって、この腐れチビが！ てめえこそ、背中に扱えもしねえ剣飾ってんじゃねえぞ！」

露天商の男が、腰の派手な装飾が施された剣に手をのぼす。女はにやりと口角をつり上げた。

「抜くのか？ この程度の安い挑発に乗せられて怪我するたあ、てめえも運がないな。いや、馬鹿なだけか？」

「怪我すんのは貴様だっ！」

露天商の男はすらりと剣を抜く。刀身に曇りは無く、中々の剣だということが傍目にもわかる。怒気と殺気で目を血走らせている男と対照的に、女は涼しい顔で、剣を抜いてさえないなかった。

「抜けっ！」

「いいから、かかってこいよ」

女はあくまで挑発するだけだ。

「死んでもしらねえぞ！ 貴様が悪いんだからな！！」

「はんっ、こっちのセリフだ」

「減らず口を！」

それが合図。男は剣を大きく上段に振りかぶって女に迫る。女は一步も動かない。男の大きな体軀は圧力となって女を襲う。が、女の表情は変わるどころか、笑みでゆがんだ。肉食獣と見紛うような獰猛な笑み。女は、ここでもようやく剣の柄に手をやる。

男は勝利を確信して、吠えた。

「死ねええ！」

女はそれをあざ笑うかのように鼻を鳴らした。

男は剣を振り下ろす。洗練されていない粗削りな剣筋。しかし、速い。女は少々目を見開きながらも、迎撃せんと剣を抜く。明らかに遅れている。それでも女は笑みのままだった。

剣と剣が激突する音。

「んなっ！？」

驚きの声を上げたのは露天商の男。彼が握っている柄の先は、まるでもともとなかったかのように、きれいさっぱり失われていた。女の方はと言うと、その手に剣は既になく、最初からそうであったかのように背負われていた。

「さあ、消えな。てめえみてえなのがいると街が荒れる」

「くそっ！ 覚えてやがれ！」

男はみっともない捨て台詞を吐いて、露店の品もそのままに雑踏の向こうへ消えていった。

店主がいなくなったことを確認すると、先ほどまで野次馬をしていた民衆が、どっと店主を失った露天に群がった。我先にと商品だったものを奪っては逃げていく。リナレスはそんなものには目もくれず、苦い表情で群がる群衆を眺めていた女に声をかけた。

「さっきは危ないところを助けてくれて、ありがとう」

「あ？」

女は苦々しい顔をリナレスに向ける。

「お前を助けたんじゃないよ。アタシが商売しにくくなるからやっただけだ」

「それでも僕は助けられたんだ！」

リナレスは女の手を取って頭を下げる。女は困ったように眉根をよせた。

「分かった、分かったよ。どういたしまして。これでいいんだろ？」

「本当にありがとう。是非、お礼をしたいんだけど、どうかな？」

「はあ？」

女は目を丸くした。このみすばらしい恰好をした青年が言葉以上のお礼をしたいと申し出てきたのがあまりにも意外だったからだ。女は思わず頷く。

「ああ、ありがたく礼を受けるとしよう。アタシはべ……いや、イレーナだ。宜しくな」

「僕はリナレス。宜しくね」

女、イレーナとリナレスはにこやかに握手を交わした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0747i/>

女好き王子の国盗り物語

2010年10月10日01時04分発行